

書評

都市空間で創造的に生き続けるマヌーシュに学ぶ

左地亮子. 2017.

『現代フランスを生きるジプシー：旅に住まうマヌーシュと共同性の人類学』

京都：世界思想社.

愛知県立大学大学院国際文化研究科日本文化専攻博士前期課程

脇田透子

マヌーシュとは、ジプシーの中でも「旅の中に住まうこと」を生き方としてきた集団であると本書で定義づけられている。フランスのマヌーシュは、早くから各地域社会で定住し始めた他のジプシーと異なり、家具馬車での移動生活を第二次世界大戦後まで続けた。以降フランスの急速な都市化の影響で、都市周縁の空き地・宿営地に定着して留まる生活を余儀なくされた彼らの多くは、必ずしも以前のように旅ができるわけではないのに、今もキャラヴァン（移動式住居）に住み続けている。本書ではその意味を考えるべく、キャラヴァンがもつ「旅」と「居住」の二側面について、それぞれ第一部、第二部で検討される。

著者・左地亮子は、ジプシー／ロマ研究専門の文化人類学者で、2017年に第39回サントリー学芸賞を受賞した。主にフランス南西部ポー地域のマヌーシュを対象に、2006年頃からフィールドワークを行ってきたという。本書はその地道な調査と、ジプシー、住まい、共同性に関する先行論の丁寧な検討を結実させた、民族誌的かつ人類学的研究書である。

第一部では、旅の道具としてのキャラヴァンを中心に、定住化の影響を受けて再編されるマヌーシュ共同体や生活空間について論じられる。移動の中で生活や社会を作ってきた人々は、家族の結婚によって出会う多様な出自の人々と親族になり、共にキャラヴァンに住まう経験を通して、柔軟に地縁共同体を築き上げていく。こうした特徴が共同体に適応力を与え、社会変化の中で彼らの居場所を再構築させている、と述べられる。

フランス政府による移動生活者政策の歴史において、複数のマヌーシュ家族が合法的にキャラヴァンをとめられる公営集合宿営地の建設は、移動生活者の一時的な宿営と出発が前提とされている。しかし、国によってこれまでマヌーシュの移動生活が制限されてきた結果、彼らは安心して移動生活へ出かけられるよう、むしろいつでも戻って生活を再開できる「定着のための土地」を望むようになった。ここにマヌーシュと行政間の生活実態の認識のずれが明らかにされる。

他に「家族用地」と呼ばれる私有地やアパートマンに定住するマヌーシュがいるが、彼らの多くは定住社会に同化せず、集合宿営地に暮らす家族や、地域のマヌーシュ共同体との関係を維持し、望めばすぐにキャラヴァン居住生活へ戻る選択肢を残している。このように、移動から定住という生活の変化は単線的でも不可逆的でもなく、「移動生活の持続と再編を伴う動的な過程」(p.18)の真ただ中に彼らが生きることが確認できる。

第二部では、居住道具としてのキャラヴァンと、マヌーシュの身体、環境、他者との関係性が考察され、キャラヴァン内外での住まいの構築が論じられる。まず、キャラヴァン外部に広がる野外環境をも生活領域とするマヌーシュが、他者に対し開放的に居住空間を作り上げていく

様子から、「視線の相互性」と「心理的遮蔽」という彼らの身構えが考察される。定住化の影響によって一箇所にマヌーシュがひしめき合う近年、身構えの若干の変化も新たに指摘される。

マヌーシュは、思春期の身体変化と、結婚という社会的変化に伴って個別にキャラヴァンを変え、死後必ず廃棄する。キャラヴァン変えは、個人の身体的／社会的変容を意味し、これによって周囲は当人に相応の社会的役割を期待するようになる。このようにキャラヴァンがマヌーシュの身体を個別化させる装置である一方、狭いその内部では、時に限られた他者と親密なコミュニケーションを交わす場としての共同的な身体空間が立ち上がる。マヌーシュの個別性と共同性の両方が、キャラヴァンを介して創出されることが分かる。

最後に、埋葬後の死者のことを、名前を含め一切「語らない」、ポーのマヌーシュ共同体における「沈黙の敬意」の意味が掘り下げられる。生者が死者個人に代わって語ることで死者の固有性を損なってしまうことを避けるために、沈黙が守られる。そして、誰もが意識的に「語らない」間、いわばその死者を知る者が生きている間、死者は固有性をもって留めおかれるのだという。また、所有者の身体や人生と共にあったキャラヴァンを廃棄することにより、所有者不在の現実が、沈黙の中、生者たちに共有される。もう、そこにはないキャラヴァンは、生者世界の新たな社会的空間的秩序の再編を促しながら、生者たちの沈黙の共同性を支えているという解釈が導き出された。

このように、本書では定住化時代のマヌーシュが今なおキャラヴァンに住まう意味が論じられるのだが、興味深い箇所は他にもある。たとえば、現代都市空間におけるマヌーシュの暮らしと身構えに関する考察から、主流社会に染みついた近代的認識をとらえ直した点だ。

近代西欧の定住民社会における一般的な住居では、門などで公私の境界を物理的に隔てて固定するが、マヌーシュのキャラヴァン居住では、主流社会にある境の意味付けが取り払われるという。マヌーシュの中でも、定住民がすぐ横を通るような空き地や道路脇、駐車場を転々としながら宿営許可なく暮らす人たちは、駐車場での洗濯物干しの光景といった自らの居住空間を、外部の他者に堂々と開いている。定住民には、彼らが公共空間を占有する違反者として映らず、やがて通報を受けた警官によって立ち退きが命じられるが、こうしたマヌーシュの身構えは、都市社会に生きる人々との間の共同性を作り出すと同時に、都市空間に異質性をもたらす、と著者は述べる。

近代国家は土地や人を均質に統御しやすいものへ再編し、そうでない者を分離する。この近代的認識が人々に浸透しているため、定住民側は異質な他者に戸惑い、創出された共同性を最小限に抑えようとする身構えをとってしまうのだ、と分析された。西欧近代の内部で、主流社会の目にふれにくいところへ追いやられながらも生き抜いてきたマヌーシュの、日常の住まいにおける身構えを明らかにし、その意味を考えることで、逆に定住民自身の無意識な身構えと、その感覚や認識を作っていた近代国家の統治のあり方が見事に照らし返されている。

同様の都市空間に生きる人々の住まい観に、日本では近頃変化が見える。2021年になった今も、新型コロナウイルス感染拡大の勢いは止まるところを知らないが、この一年で、在宅ワークなど遠隔形式の対応への切り替えを余儀なくされ、ライフスタイルが急激に変わったという人は少なくないだろう。これにより日本では、自らの住まいや仕事、すなわち生き方を考え直す人が増えてきている、としばしば報道される。以前は退職後のセカンドライフとされていた「地方移住」を考える若い世代が、現在目立っているようだ。

そのような中で、サブスクリプション型移住サービスの提供がなされている。「移動する暮らし方」がモットーの HafH(ハフ:Home away from Home)では、月額 82,000 円で世界約 300 の提携拠点に住み放題になる。利用者層は 20 代から 30 代が 7 割を占め、具体的にはアドレスホッパー、旅好きや出張の多い会社員、コロナ禍で帰国できなくなった外国人などがある。電源と Wi-Fi が全拠点に完備され、職住近接の共同住宅(Co-living)となっている。HafH の他に、月額 4 万円で日本各地 60 か所に住み放題の ADDRESS もある。こちらも同じく Co-living だが、特筆すべきは、別途料金を支払って好きな拠点の「固定ベッド」(ドミトリーの中の占有ベッド)に住民票登録をすることも可能である点だ。ドミトリーの中の一ベッドが住民票の登録先になるとは、マヌーシュのキャラヴァン住まいが思い起こされる。

このように、日本においても、他者との共同生活を前提に、自宅や実家などいつでも帰れる場をもった多拠点移動、あるいはそれなしに旅に住まう暮らしの両方が、現在実践されている。めまぐるしい社会変化の内部でたくましく生きるマヌーシュの創造的な住まいに学べるのが、まさに今、本書から見出せるのではないか。

「コロナで変わる「地方移住」働き盛り世代が飛び出すワケ」『週刊朝日』2020 年 9 月 25 日。
「漂うように、旅するように 移住支援サービスで多拠点生活を堪能する」『アエラ』2020 年 8 月 17 日。

「制約だらけの日本の「住居問題」に対する、若者たちの一つの答え」

<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/75358?page=1&imp=0> 最終閲覧日: 2020 年 10 月 12 日。

「ADDRESS」<https://address.love> 最終閲覧日: 2020 年 10 月 12 日

「ADDRESS 拠点一覧を一挙公開します」<https://note.com/address/n/n383ebd3c6676> 最終閲覧日: 2020 年 10 月 12 日。

「HafH」<http://www.hafh.com> 最終閲覧日: 2020 年 10 月 12 日。